

### 35. 小児に対する高圧酸素療法 —術後イレウスの治療を中心に—

永井米次郎 高橋英世 真家雅彦  
大沼直躬 樋口道雄 古山信明  
鈴木卓二 大塚博明  
(千葉大学小児外科, 中央手術部)

高圧酸素療法 (OHP) は各種疾患に応用されて成果をあげているが, 小児に対する OHP の報告は少ない。我々は, 1978年より小児の術後イレウスに対して保存的治療として OHP を積極的に施行しており, その経験と問題点についてのべる。

**対象および方法:** 1974年以来, 当院における現在までの OHP 施行症例は659例, のべ治療回数は8745回である。これらのうち15歳までの小児例は, 158例, のべ1248回で, 小児症例の中でも術後のイレウスに対しては, 106例, のべ422回と, 最も多く用いられている。機種は Vickers 社の man chamber を用い, 最高圧1.5-2 ATA, 1回あたり60-90分で, 1日1回, 必要があればくりかえした。初期には乳幼児に対して鎮静剤を使ったが, 現在では使用していない。

**成績:** 術後イレウス106例についての成績は, イレウス解除85, 手術21で解除率は80%であった。手術例のうち13例は絞扼性で8例が癒着性であった。諸家の報告に準じた, 絞扼性イレウスを除外した単純性癒着性イレウスとしての解除率は91.4%となった。合併症は耳痛2, 多呼吸1, 嘔吐3がみられ, 一時的に中止した症例もあったが, 以後は問題なかった。

**まとめ:** 小児に OHP を施行する際には, ほとんどの場合耳管の通過は確かめられず, 対話も不可能であることから, 第一種の装置を用いている事も加えて, 最高圧, 時間などの条件は成人とは異ならざるを得ず, 又注意深い観察が必要である。小児の術後イレウスについては絞扼が疑われない限りまず保存的治療を行っているが, OHP は極めて有効な治療法であった。

### 36. 術後肝障害に対する高圧酸素療法

江崎卓弘<sup>1)</sup> 八木博司<sup>2)</sup> 兼松隆之<sup>1)</sup>  
竹中賢治<sup>1)</sup> 園田孝志<sup>1)</sup> 古田斗志也<sup>1)</sup>  
矢永勝彦<sup>1)</sup> 杉町圭蔵<sup>1)</sup> 井口 潔<sup>1)</sup>  
(<sup>1)</sup>九州大学第二外科  
(<sup>2)</sup>八木厚生会八木病院)

**目的:** 術後肝不全は重篤な合併症であり, 現在のところ的確な治療法はない。最近, 我々は術後肝不全に対し高圧酸素療法を行い, 著効を奏した2症例を経験したので報告する。

**症例(症例1):** 57歳, 男性, 肝硬変併存肝癌の診断で右二区域切除術を施行した。術後第32病日に, 臨床所見および脳波により肝性脳症を確認した。直ちに3回, 血漿交換を行ったが肝性脳症は持続したため, 第47病日より70病日までに計20回, 高圧酸素療法を行った。1回の治療圧力2 ATA, 治療時間80-90分であった。その結果, 脳症は消失し第78病日に退院した。(症例2): 55歳, 男性, 肝硬変兼食道静脈瘤および原発性肝癌の診断で, 経腹的食道離断術および肝右葉楔状切除術を施行した。術後よりビリルビンが漸増し, 術後第13病日に総ビリルビンは, 10.5 mg/dl となった。第16病日より48病日までに計28回, 高圧酸素療法を行った。その結果, 総ビリルビン値は漸減し, 70病日に2.6 mg/dl となり76病日に退院した。

**結論:** 手術により侵襲を受けた肝細胞の機能を賦活化するために肝血流量の関与は大きく, 高濃度の酸素供給は極めて重要と考えられる。今回, 術後高度肝障害例に対し高圧酸素療法を施行したところ肝性脳症の消失および高ビリルビン血症の改善をみた。以上の経験から本療法は, 急性, 特に術後などの肝障害に対する新しい治療法として期待される。